

# 東京ステーションギャラリー TOKYO STATION GALLERY

オープン および 東京駅復原工事完成記念展開催のお知らせ

10/1  
mon.  
OPEN!

## 歴史と未来をつなぐ東京駅の美術館としてより本格的に再登場します

東京ステーションギャラリーは1988年、駅を単なる通過点ではなく、香り高い文化の場として皆さまに提供したいという願いを込めて、東京駅丸の内駅舎内に誕生しました。

東京駅の歴史を体現する煉瓦壁の展示室をもつ美術館として親しまれ、開館以来18年間にわたり、105本のさまざまなジャンルの展覧会を開催、延べ約235万人の来館者をお迎えしました。2006年、東京駅の復原工事に伴い一時休館をいたしました。その間も旧新橋停車場 鉄道歴史展示室などで館外活動を続けてまいりました。そして、2012年秋、復原工事を終えた駅舎にて、さらに時代に即し、進化したかたちで6年半ぶりに新しいスタートを切ることになりました。東京駅丸の内駅舎が、辰野金吾の設計によって創建されたのは、1914（大正3）年のことです。東京駅は、日本の鉄道の上りと下りの基点であり、多くの幹線の0キロポストが設置された「中央駅」として位置づけられています。また、日本の近代史の舞台として、目撃者として、幾多の激動の時代をくぐりぬけてきました。地理的・歴史的に近現代日本の中核に位置し、重要文化財でもある東京駅舎にて美術館活動を行うことの意義を深く認識しつつ、今後の活動を続けてまいります。

### 展覧会スケジュール

東京駅復原工事完成記念展

始発電車を待ちながら

2012/10/1(月) → 2013/2/24(日)

木村荘八展 [仮称]

2013/3/23(土) → 5/19(日) [予定]

エミール・クラウスと印象派展 [仮称]

2013/6/8(土) → 7/15(月祝) [予定]

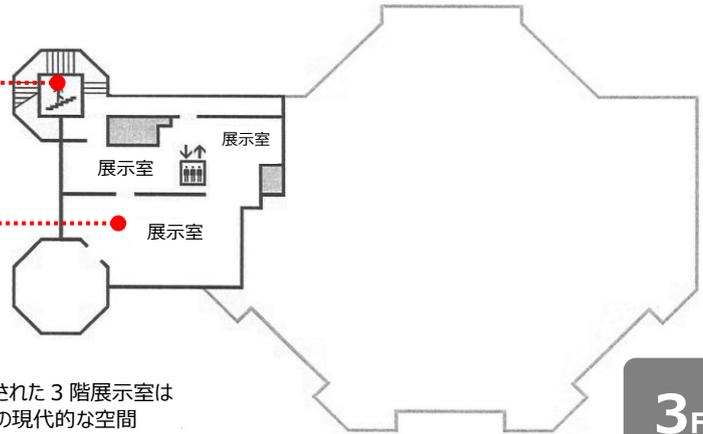


旧ギャラリーのシャンデリアが吊り下げられた八角形の廻り階段で2階展示室へ



館内写真⑥▶

復原された3階展示室は白壁の現代的な空間



3F



【窓および一部の壁にアルミパネルをはめた場合】

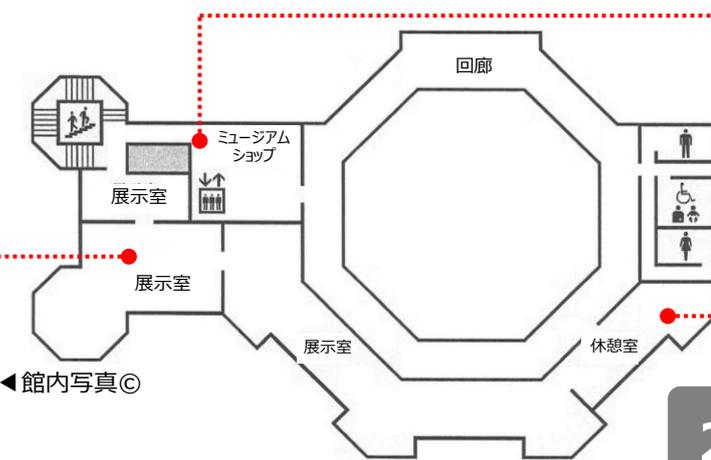


【窓にのみアルミパネルをはめた場合】



【窓にアルミパネルをはめない場合】

2階展示室は東京駅の歴史を感じさせる煉瓦壁を生かした空間  
黒いアルミパネルをはめれば外光遮断可能



◀ 館内写真⑦



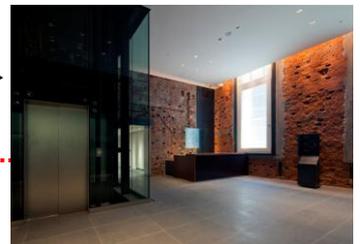
展覧会鑑賞後、休憩室から駅前広場を眺めたら八角形の回廊を渡ってミュージアムショップへ



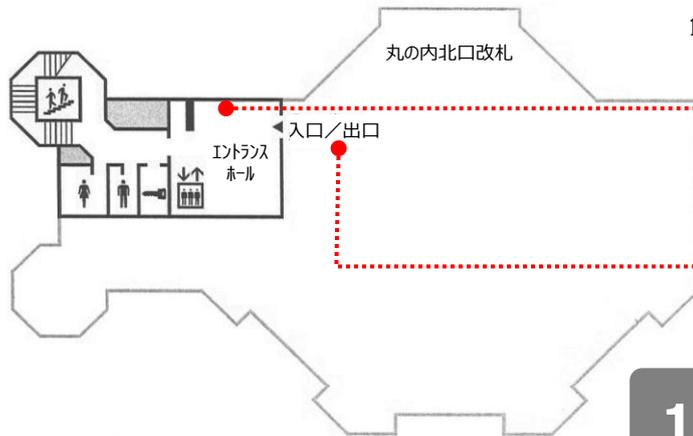
▲ 館内写真⑧

2F

券売機で入館券を購入後エレベーターでまず3階展示室へ



館内写真⑨▶



1F



丸の内北口改札を出てすぐ右手にある利便性の高いエントランス（イメージ）



## 展覧会概要

2012 年秋、東京ステーションギャラリーが活動を再開します。

本展は、2006 年以來、足かけ 6 年半にわたった東京駅の復原工事完成を祝う展覧会として企画されました。9 人（組）の作家たちによる意欲的なアート作品をご覧ください。出品されるのは、「東京駅」あるいは「鉄道」という視点から発想された作品です。

1914 年に開業し、日本の鉄道の起点として 1 世紀にわたって利用されてきた東京駅は、時に歴史的イベントの舞台となり、文学作品や美術作品にも多く取り上げられるなど、人々の記憶に深く刻み込まれています。この東京駅をモチーフに作品を制作するのは、秋山さやか、柴川敏之、廣村正彰、本城直季、ヤマガミユキヒロの 5 人の作家たちです。

鉄道の歴史は、日本の近代化の歴史でもあります。鉄道は、日本という国が明治維新以降、海外との交流を通して成し遂げてきた近代化の象徴と言っても過言ではありません。大洲大作、クワクボリョウタ、パラモデル、廣瀬通孝は、鉄道を発想源にした、あるいは鉄道を使うことから生み出された作品を出品します。

創建当時の煉瓦壁を生かした、歴史を感じさせる展示室は、当館の大きな特色のひとつです。独特の雰囲気を持つ空間の中で展開される、個性あふれる作家たちのユニークな作品世界をお楽しみください。

### 出品作家

ARTISTS

#### 秋山さやか

SAYAKA AKIYAMA

#### 大洲大作

DAISAKU OOZU

#### クワクボリョウタ

RYOTA KUWAKUBO

#### 柴川敏之

TOSHIYUKI SHIBAKAWA

#### パラモデル

PARAMODEL

#### 廣瀬通孝

MICHITAKA HIROSE

#### 廣村正彰

MASAAKI HIROMURA

#### 本城直季

NAOKI HONJO

#### ヤマガミユキヒロ

YUKIHIRO YAMAGAMI

**秋山さやか** SAYAKA AKIYAMA ①

1971年、兵庫生まれ。作品を展示する場所で一定期間を過ごしなが、そこを起点に日々あるき、現地で収集した糸やさまざまな素材を、地図などにひと針ずつ縫い付けていく独自のスタイルで制作する。

「ベルリン—東京」展(ベルリン新国立美術館、2006年)、「ステッチ・バイ・ステッチ—針で描くわたし—」展(東京都庭園美術館、2009年)などに出品。フィリップモリスアートアワード大賞(2000年)、公益信託タカシマヤ文化基金・タカシマヤ美術賞(2010年)受賞。

《地をうごく 山形 2012 4月17日～5月3日》  
2012年  
(写真は部分)



**大洲大作** DAISAKU OOZU ②

1973年、大阪生まれ。日常や旅の中で列車などの車窓に広がる風景を、窓に踊る光やスピード感、あるいは土地の風物や生活に滲む情感と重ね合わせて撮影し、心に映る光景として描き出す写真作品「光のシークエンス」などを発表。現在、風景の影に潜むものを探る写真作品「INVISIBLESCAPES」を平行して制作している。

個展「光のシークエンス」(京都 space B、2010年)、東日本大震災復興支援チャリティ写真展「FOR YOUR SMILE 311」(大阪 中之島デザインミュージアム、2011年)、個展「INVISIBLESCAPES」(ベルリン galerie son、2012年)。

<http://www.oozu.info/>



《光のシークエンス》より 奥羽本線 弘前駅  
2008年12月27日  
©Daisaku OOZU

**クワクボリョウタ** RYOTA KUWAKUBO ③

1971年、栃木生まれ。エレクトロニクスを使った作品を数多く発表。人と作品の関係性を重視した親しみやすいメディアアート作品は、国内外で高い評価を得ている。《10番目の感傷(点・線・面)》は、照明を落とした展示室に、ライトを付けた模型の電車を走らせ、線路の周囲に置いた日常品を照らすことで、床・壁・天井に次々と動く影が広がり、特異な空間を作り出す。

第7回文化庁メディア芸術祭アート部門大賞受賞(2003年)、第14回同優秀賞受賞(2010年)、芸術選奨新人賞受賞(2011年)。

<http://www.vector-scan.com/>



《10番目の感傷(点・線・面)》  
2006年  
© 2010 クワクボリョウタ 撮影:木奥恵三  
写真提供:NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]

## 柴川敏之 TOSHIYUKI SHIBAKAWA ④

1966年、大阪生まれ。イタリアのポンペイ遺跡などに触発され「2000年後から見た現代社会」という壮大なテーマをもとに活躍する。全国のミュージアムをはじめ、街の商店街や歴史的建造物での、地域や場所にこだわった展覧会やプロジェクトを精力的に行い、ユニークなワークショップを通して、ものの存在や現代の諸問題を見つめ考え直す活動も続けている。

「2000年後の美術館☆プロジェクト」(高知県立美術館、2008年)、「2000年後の未来遺跡」(青森県立美術館、2008年)、「2000年後の冒険ミュージアム」(広島県立歴史博物館、2003年)。

<http://www.planetstudio41.com/>

《PLANET ICON  
(2000年後に発掘された招き猫の化石)》  
2008年



## パラモデル PARAMODEL ⑤

大阪出身の林泰彦 (はやし・やすひこ/1971年生) と、中野裕介 (なかの・ゆうすけ/1976年生) が2001年に結成したユニット。模型や青いレールの玩具、塩ビパイプなどを床から天井まで縦横無尽に走らせ、生きもののように増殖させる。「玩具・日用品を用いて、机を大きくはみだし、世界全体で模型遊び」を繰り広げ、世界的にも高い評価を得る。

個展「パラモデルの 世界はプラモデル」展(西宮市大谷記念美術館、2010年)、「パラモデルのプラモデルはパラモデル」(国際交流基金ベトナム日本文化交流センター、2012年)など開催。



《パラモデルック・グラフィティ》  
2011年  
©paramodel, photo: paramodel  
国立国際美術館「世界制作の方法」展より  
courtesy of MORI YU GALLERY

## 廣瀬通孝 MICHITAKA HIROSE ⑥

1954年、神奈川生まれ。東京大学大学院情報理工学系研究科教授。専門はシステム工学、ヒューマン・インタフェース、バーチャル・リアリティ。Sharelogは、科学技術とアートの接点を探るデジタル・パブリックアートの研究プロジェクトから生まれた。交通系ICカードをかざすと、過去の利用履歴がスクリーンに映し出される。鑑賞者は、利用した駅の記憶を思い出すとともに、電車に乗るという行動をこれまでとは異なる視点で体験できる。

主な著書に『バーチャル・リアリティ』(産業図書)。総務省情報化月間推進会議議長表彰、東京テクノフォーラムゴールドメダル賞、大川出版賞受賞。



《Sharelog》  
2006年

**廣村正彰** MASA AKI HIROMURA ⑦

1954年、愛知生まれ。田中一光デザイン室を経て1988年、廣村デザイン事務所設立。商業店舗や企業ビル、公共施設等のVI（ヴァジュアルアイデンティティ）やサイン計画を数多く手がける。デザインは情報を「伝える」と同時に「気づき」をもたらす役割を負い、そこから生まれるコミュニケーションが、生活をより「豊か」にするというメッセージをこめる。日本グラフィックデザイナー協会新人賞（1987年）、N.Y.ADC 銀賞（1995年）、グッドデザイン賞金賞（2010年）など受賞。主な著書に『空間のグラフィズム』（六耀社、2002年）。鉄道博物館（2007年）および東京ステーションギャラリーの新ロゴ（2012年）を制作。

<http://www.hiromuradesign.com/#/home/>



個展「ジュングリーンー意識が動く瞬間」  
（西武池袋本店 西武ギャラリー）より  
2011年

**本城直季** NAOKI HONJO ⑧

1978年、東京生まれ。中央はピントが合ったように鮮明に、上下はぼんやりとさせ、「あおり」と呼ばれる遠近法を用いて都市を俯瞰で写す。建築物や自動車など「人工物」と、そこにうごめく人影との対比がジオラマを眺めるような感覚を引き起こさせる。

個展「Play Room」(クリテリウム67 水戸芸術館、2006年)開催。2006年、写真集『small planet』(リトルモア)を刊行し、第32回木村伊兵衛写真賞を受賞。また同年よりANA 機内誌『翼の王国』に写真連載中。

<http://www.honjonaoki.com>



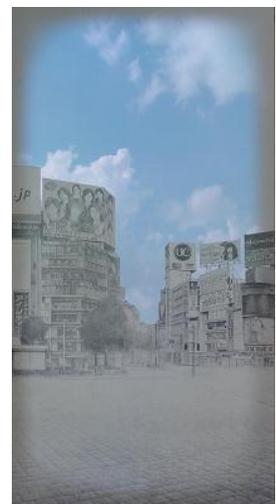
《small planet tokyo-station》  
2004年  
courtesy of nap gallery

**ヤマガミユキヒロ** YUKIHIRO YAMAGAMI ⑨

1976年、大阪生まれ。ある風景を細密に描いた上に、同じ場所で撮影した映像を重ねるキャンバスプロジェクションのスタイルで作品を制作。時の経過や光のうつろいまで表現された作品によって、鑑賞者は日常的な都市の風景に潜んだ美しい表情に気づかされる。

「京都府美術工芸新鋭選抜展」(京都市文化博物館、2005年)、個展「Sheltering Sky」(京都 Gallery PARC、2011年)、第11回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞(2008年)。

<http://www.yamagamiyukihiro.net/>



《Sheltering Sky》  
(キャンバスプロジェクション)  
2011年

[メインシグネチャー]



新しいロゴが決まりました

【コンセプト】

東京ステーションギャラリーの英文頭文字 T を、三つの煉瓦をつなぐ「目地」をモチーフにデザインしました。三つの煉瓦は、美術館活動の柱となる「近代美術の再発見」「現代アートへの誘い」「鉄道・建築・デザインとの出会い」を表しています。「目地」が煉瓦と煉瓦をつなぎ建造物になるように、人と文化、東と西、東京と地方等の起点となりつないでいく。さらに隠れた存在の「目地」を前面に出すことで、広く才能を発掘・発信していく美術館でありたい、という思いがこめられています。（ロゴ制作を手掛けた廣村正彰氏のプロフィールは展覧会出品作家プロフィールを参照してください）

[サブシグネチャー例]



ミュージアムショップ TRAINIART [トレニアート] がオープンします

人と人を、人と文化をつなぐ駅の役割と同じように、「つなぐ」をコンセプトとして  
展覧会関連商品をはじめ、オリジナルグッズや国内外のアートグッズを多数セレクトして紹介します

- 歴史的建造物である東京駅をモチーフに、アーティストやデザイナーが自由に表現する、さまざまな表情の東京駅をお楽しみください
- 世界各国の楽しいアートグッズや、新進アーティストのセンスを感じさせる商品を東京駅から発信します
- 日本の玄関口として東京駅を利用される海外からのお客さまにも楽しんでいただけるような、日本の伝統や文化が融合したデザイン性の高い「日本のお土産」を提案します

営業時間…開館時間に準じます